

新たな教材知識の認知過程における問題点の考察

—教材の構造化から伺える知識獲得の困難性—

能 勢 保 幸

（北海学園大学大学院経営学研究科）

I 目 的

初学者は、初めて学習する科目の教材内容をどのように認知し、理解し、問題点を解決していくとするのか。その知識獲得のために困難となっている問題点を探求することを試みた研究である。この研究は、初学者が新たな教材内容を獲得しようとする際に、学習者自身が教材知識をわかり易く理解するため、教える側が教材内容を構造化していくという目的がその先にある。

これまでの研究の過程については次の通りである。教育実習生が教育実習において、授業実習経験、授業参観、教員からの指導助言、生徒とのコミュニケーションなど、実習中の活動によって、授業に対する視点が変化することがこれまでの研究で知られている。授業に臨む態度（教材研究等）に影響を及ぼすことも示唆されてきた。実習中の活動を詳細に分析するために、一事例について、教育実習前及び実習期間中に、半構造化面接法による約1時間の面接調査を毎日行い、実習中のイメージの変化と教材研究活動について語ってもらった。語りデータの他、実習日誌、指導案、参与観察から、その授業における視点の変化と教材研究に対する態度の変化が生起したプロセスを分析し、検討した結果、授業を行う単元の教材を複数の視点によって構造化できているかが最も重要な要因であることが示唆された。

このことを踏まえて、教材を構造化するためには、初学者である生徒がどのような点に躓いているのか、教材知識を獲得しようとする際の問題点を明らかにする必要がある。

II 方 法

4月に入学した高校生のうち2クラス76名を対象に選択式と記述式についてのアンケート調査を行った。さらに、その中から6名の生徒に対して半構造化面接法によるインタビューを実施した。このアンケートは、入学後の4月から6月までに学習した科目「簿記」の教材内容についてのアンケート調査である。アンケート調査データとインタビューデータ、これら二つのデータをもとに分析を行った。

III 結果と考察

生徒が教材知識を認知し理解して獲得する際の問題点を探るため、科目「簿記」の教材についてアンケート調査及びインタビューを行った結果、次のようなことが判明した。

簿記は大きく二つの構造から成り立っていると考えられる。一つは、簿記の概念である。他方の一つは、会計システムのプロセスである。生徒は、初期段階で簿記の概念及び簿記一巡の手続きについての基本的なプロセスを学習する。アンケート調査及びインタビューを分析した結果、生徒が最も困難であった点は、『いままで獲得した知識では理解できない』という調査結果から、それまでの既有知識が新たに獲得しようとする知識と直接結びつかない点にあるといえる。例えば、一般的に「現金」という概念は小さな頃からその知識を獲得している。「現金」とは、お金のことであるという概念がすでに備わっている。ところが、簿記上の「現金」の概念は一般的な概念と少し異なっている点にある。生徒にとっては、このことが新たな知識の獲得に困難をきたしているといえるだろう。また、一般的概念知識と簿記的概念知識の違いとともに、『覚えることが多すぎる』という調査結果から、新たに獲得しなければならない知識量が多過ぎる点にある。さらには、簿記会計システムが煩雑であるといえるだろう。高等学校の学習は、主要5教科についてはすでに小学校・中学校で基礎・基本の既有知識が獲得されているので、新たな知識の獲得は容易にできると考えられる。しかし、簿記のような専門的な分野における新たな知識の獲得は、それまでの既有知識では対応しにくい点が多いので、生徒が教材知識を獲得する際に困難をきたしていると考えられる。また、生徒が困難に直面した時や理解を深めるために、『毎日復習をした』との調査結果や、『教材を理解している人に聞く』ことや『後で教師に聞く』こと、あるいは『問題を解く回数を多くする』などの方法で克服しようとしたことが伺える。

このように生徒が抱える問題点を克服させ理解させるためには、教材研究の段階において、教材内容の精選とともに教材知識を複数の視点から構造化することが重要であるといえるであろう。